

*DIONIGI, I NOMI DIVINI: De divinis nominibus*

Introduzione e testo critico: Moreno Morani,

Traduzione e note: Giulia Regoliosi, Commento: Giuseppe Barzaghi

(I Talenti: Collana diretta da Moreno Morani, 6),

Edizioni San Clemente - Edizioni Studio Domenicano,

Bologna 2010, pp. 448, ISBN 978-88-7094-696-3, A/5, €28,00.

秋 山 学

本書は、モレノ・モラニ氏が編集主幹を務める「イ・タレンティ」叢書の第6巻として上梓された、「偽ディオニュシオス文書」の一書『神名論』の原典テキストおよびイタリア語訳の対訳版である。伊訳はモラニ氏夫人のジュリア・レゴリオズィ女史の手になり、各頁下部には、女史による総計181個に及ぶ詳細な注が付されている。本文テキスト(116-365頁)に先立ち、モラニ氏による序論(5-64頁)、氏と女史による「文献案内と写本一覧」(65-69頁)が収録され、さらにドミニコ会司祭ジュゼッペ・バルザギ師による「トマス・アキナス的・神秘的基礎にもとづく『神名論』への観想的アプローチ」との副題をもつ「<万物における万物>と神学的思索」という序説(73-114頁)が収められている。巻末(369-437頁)にはモラニ氏の手になるテキストの異同一覧があり、現在望みうる最新最良の『神名論』校訂版テキストだと言えよう。

以下、1)モラニ氏の事績、2)『神名論』を初めとする「偽ディオニュシオス文書」校訂版・各国語訳の歴史、および本書(特にテキスト部分)の特質、3)「イ・タレンティ」叢書の特徴、といった点を中心に書評を行いたい。

1)本書評で取り上げるモラニ氏は1946年生まれ、現在イタリア・ジェノヴァ大学の博言学・言語学講座(Glottologia e Linguistica)教授を務め、併せてサンスクリット語学文学講座をも兼担しておられる。ご専門はインド・ヨーロッパ語族言語学と古典文献学で、前者に属す業績としては『ギリシア言語学序説』(1999)、『ラテン言語学序説』(2000)、『インド・ヨーロッパ言語学概説』(2007)

があり、一方後者に属すものとしては、ライプツィヒのトイプナー社より出版された、エメサのネメシオス『人間の本性について』の校訂版がある（1987：後述）。このほかインドの詩人カーリダーサによる『シャクンタラー姫』の伊訳も公刊されている（1982）。またチリの古典学雑誌 *Limes* の編集主幹の任にあると同時に、古典文献学の学界誌 *Zetesis* の編集主幹を夫人とともに務めておられる。筆者は、2006年より口頭発表を行っているハンガリー教父学協会年次大会において、モラニ氏と親交を結ぶに至った（本誌既刊の拙評をも参照）。2010年に行われた氏の仏語による講演「異教徒の自然法からキリスト教の掟へ：言語学的注記」のハンガリー語訳は、2014年にブダペシュトで公刊された同協会の年次大会記録 *Studia Patrum* 第V巻の17-24頁に収録されている。

2) 現在、われわれが通常用いる偽ディオニュシオス文書『神名論』の標準的な校訂版テキストは、1990年に Walter de Gruyter 社より刊行された *Corpus Dionysiacum* の第I巻であり、これはベアーテ・レギーナ・スフラ女史の手になるものである。もっとも、これ以前に *Corpus Scriptorum Christianorum Orientalium* のアルメニア語シリーズ第17-18番 (vol. 488-489) として、ロバート・W・トムソンの手で『神名論』のアルメニア語訳が公刊されている（1987）。残念ながらスフラ女史の校訂版テキストでは、モラニ氏の指摘のように（本書36頁）、このアルメニア語訳に関してまったく考慮・言及が行われていない。かくして本書は、初めてギリシア語テキストとイタリア語訳文を対訳形式に掲載した『神名論』の版本であるというばかりでなく、アルメニア語訳を考慮に入れた初めての原典校訂版として、無比の価値を有するものである。

モラニ氏は前述のように、この『神名論』テキスト校訂以前にネメシオス『人間の本性について』の校訂版を出版しておられるが、この際すでに、アルメニア語訳写本の扱いについて、現在と同じ視座を確立されていたことがわかる（トイプナー版ネメシオスのラテン語序文 X-XI 頁参照）。ネメシオスの場合、そのアルメニア語訳は、717年にダヴィドゥス・ヒュパトス、およびスイウニクのステファノス (Siunikh は現在のイラン北部～アゼルバイジャン南部の町) によって行われている。その前後に彼ら両名は、ネメシオスばかりでなく、偽ディオニュシオス文書群、あるいはニュッサのグレゴリオス『人間創造論』をアルメニア語に訳出する事業に携わったことが知られている（43頁）。

スイウニク（モラニ氏はイタリア語綴りでスイウニアと表記）のステファノス

らによるアルメニア語訳については、本書序論の 42-45 頁に詳しく解説がなされている。彼らはアナスタシオス II 世（在位 713-715）の治下、コンスタンティノポリスにおいて訳業に従事したと思われるが、当時はアルメニア文字の発明（5 世紀）以降普及した「ヘレニズム主義」の全盛期であった。ステファノスらはギリシア語原典の訳出に際し、語彙の意味的内包を度外視し、1 原語に対し 1 訳語を当てるという極端な直訳主義を貫いた。この方針は、原テキストを傍らに置かなければ訳文を理解し難いという弊を有するものの、見方を換えれば、これは訳文のみから原文を復元することが可能な、古典文献学には大いに寄与するプロセスだと言える（44 頁）。ちょうど仏典のチベット語訳が、散逸したサンスクリット本を「還梵」して復元するのに有用であるのと似た現象だと言えるであろうか。トムソン版で用いられているアルメニア語訳の写本は、エレバンにあるマテナダラン国立古文書館に所蔵される、少なくとも 50 種にのぼる偽ディオニュシオス文書写本のうち、13-14 世紀に遡る 6 種の写本であるが、これらは比較的均質であることから、アルメニア語訳は、最古のギリシア語写本のテキストを忠実に再現するものだと考えられる（44-45 頁）。

ベルツェル・イシュトヴァーン氏ほかのシリア学研究者により、偽ディオニュシオス文書群に関しても、シリア語訳が果たす寄与の大きさについては周知の事実となっている（37-41 頁）。これに加え、モラニ氏自身が実践されるように、ギリシア語と同じく印欧語に属すアルメニア語の訳本がギリシア語原典の本文批判に大いに寄与するとなれば、これは古典文献学上の一大事件であり、今後アルメニア語訳の組織的探索と研究が推進されねばならないであろう。

先述のように、ステファノスらによるアルメニア語訳事業は、グレゴリオスの『人間創造論』にも及んでいる。『人間創造論』のテキスト校訂に際して、モラニ氏のような鋭敏かつ斬新な本文校訂の感覚が有効だとすれば、その成果は古典文献学・ギリシア教父学界にとって、待望されるものとなる。実際プリル版のグレゴリオス全集では、主要著作は既刊であるものの、2015 年初頭段階で『人間創造論』は未刊である。評者の知るところではないが、アルメニア語写本の評価をめぐる学界の進展が、発刊状況に影響しているのかも知れない。

モラニ氏は、すでに 1970 年に「エメサのネメシオス『人間の本性について』のアルメニア語訳をめぐる」と題する論考を、1981 年には「ネメシオス『人間の本性について』の写本伝承」と題する著書を公刊されており、極めて早く

から、アルメニア語訳の意義について、エメサのネメシオスの著作を軸に考究しておられたようである。氏には「偽ディオニュシオス・アレオパギテスのアルメニア語訳の意義について」と題する講演記録があり（2001年10月）、これは氏のフェイスブックから閲覧可能である。

3) 叢書「イ・タレンティ」は、当初マルタ・ソルディ女史の主宰によって刊行されていたが、現在ではモラニ氏が責任編集者である。わたくしの許には、(2013年時点での)既刊14点のうち、モラニ氏より贈呈された3点(1:テルトゥリアヌス『キリスト教の弁明』, 6:ディオニュシオス『神名論』, そして13:ダマスコのヨハネ『正統信仰論』)がある。驚くべきことに、モラニ氏はこのうち、テルトゥリアヌス『弁明』のテキスト解説(1:67-88頁)をも手がけておられる。なおこの叢書には、第14巻としてマッテオ・リッチ(1552-1610;中国名は利瑪竇)による『カテキズモ』(『天主實義』)も収められている。また第6巻に続いて第7巻には、やはりディオニュシオスの『神秘神学』と「書簡」1-5が収められている(訳注はマッテオ・アンドルフォ氏が担当)。

モラニ氏を中心とした、アルメニア語訳を駆使した偽ディオニュシオス文書の校訂作業は、『神名論』以外にも、『天上位階論』を初めとして今後継続され、この「イ・タレンティ」叢書から公刊されるものと思われる。この叢書に関して注目すべきは、アルメニアのエリシャの著作が収録されているばかりでなく(第2, 第5巻)、トマス・アクィナスの作品も順次収められる予定だという点である。教父学とスコラ学、古典学とオリエント学といった枠組みを縦断するそのスコープと内容、企画の展開に、われわれの興味は尽きない。またこの叢書と同様、ドミニコ会学院出版部から発刊されているものに「スルス・クレティエンヌ イタリア語版」がある。周知の通り「スルス・クレティエンヌ」叢書は、1942年にアンリ・ド・リュバクとジャン・ダニエルによってリヨンで創始されたキリスト教古典叢書であるが、2006年よりボローニャのドミニコ会が、フランス母体との緊密な連携を保ちつつ、イタリア語訳を付し文献目録を刷新した原典対訳版を順次刊行している(2013年時点で既刊13冊を数える)。

昨今、古典文献学と教父文献学、ギリシア語文献学とラテン語文献学の専門分化が行われ、研究上の乖離が進んでいる。これら複数領域にまたがるばかりでなく、オリエント諸言語にまで論及しつつ古典原典テキストの校訂を行える研究者は、世界中を探してもほんの一握りしか見出されないだろう。モラニ氏は間違い

なくそのうちに数えられ、現代世界における最も優れた印欧語古典文献学者の一人だと言える。氏の一層のご健勝を祈念する次第である。

---

Jay M. Hammond, J. A. Wayne Hellmann and Jared Goff (eds.),  
*A Companion to Bonaventure*,  
(Brill's Companions to the Christian Tradition, vol. 48),  
Brill, Leiden/Boston, 2014, pp. 588

---

松 村 良 祐

本書は、Brill から出版されているシリーズ *Companions to the Christian Tradition* の中の一冊である。このシリーズは、中世から近世にかけてのキリスト教史上の人物や思想を主題とした論文集であり、中世の神学者（大グレゴリウスやエックハルトなど）に関するものや、ルネサンス期の天文学、中世後期のアリストテレス注解といった特定のテーマを取り上げたものが既に出版されている。また、本書の主たる編集に当たった Jay M. Hammond と J. A. Wayne Hellmann は、共にセントルイス大学で教鞭を執る同僚であり、ボナヴェントゥラのみならず、アッシジのフランシスコをはじめとする初期フランシスコ会の活動に精通した米国を代表する研究者である。

ところで、ボナヴェントゥラに関する研究は、20 世紀初頭のクアラッキ版の刊行以来、多くの重要な研究が着実に積み重ねられてきた。わけても特筆すべきであるのは、J. G. Bougerol (ed.), *S. Bonaventura 1274-1974* (Grottaferrata: Collegio S. Bonaventura, 1973-1974) と A. Pompei (ed.), *San Bonaventura Maestro di Vita Francescana e di Sapienza Cristiana* (Roma: Pontificia facoltà teologica san Bonaventura, 1976) の二編である。ボナヴェントゥラの没後 700 周年を記念して出版された上記二つの論文集は、併せて 200 本を超える論文を収録し、ボナヴェントゥラ自身の思想以外にも、文学作品や絵画、政治思想史の中に登場するボナ